邪馬台国の時代⑤

～邪馬台国への道②対馬と壱岐～

河村哲夫

帯方郡から狗邪韓国へ

『魏志倭人伝』は記す。

「(帯方)郡より倭に至るには、海岸に循(したが)いて水行し、韓国を歴(へ)て乍(たちま)ち東し、其の北岸狗邪韓国に到る。郡より七千里」

前述したとおり、『魏志倭人伝』は、水行 7 日＝7,000 里と機械的に換算しているが、実際の距離は、リアス式の複雑な地形と港湾工事などによる地形の変化のために正確な測定は難しいものの、おおむね 700 キロ、1 日あたり約 100 キロとなる。

陸路でいえば、沙里院から金海まで直線距離で約 470 キロ。偵察・荷駄類運搬等の別動隊が陸路で 23 日かかったとみて、1 日あたり約 20 キロ歩いたことになる。

○帯方郡から狗邪韓国まで

	日数	距離	1 日あたり
水行	7 日	約 700 km	約 100 km
陸行	23 日	約 470 km	約 20 km

水行 1 日あたり約 100 キロメートルというのは、かなり過大な気がするが、宗像沖ノ島と対馬北

端の鰐浦間の距離が約 80 キロであることからみれば、ギリギリの距離であろうか。

陸路については、季刊「古代史ネット」第 6 号において、司馬懿が遼東の公孫氏を討伐するにあたり、洛陽から遼東までの陸路 4,000 里の所要日数について、

「往路に百日、攻めるのに百日、帰路に百日、途中の休息に六十日、ほぼ一年もあれば足りましょう」

と答えたことを紹介した。

100 日で 4,000 里だから、「1 日 40 里」とみていることになる。1 里 415 メートルで換算すると、1 日 16.6 キロ程度の行軍となる。

帯方郡から狗邪韓国までの陸行 1 日 20 キロという数字は、まずまず許容範囲内といえようか。

ついでながら、『唐六典』には、

「諸行程は、馬では日に七十里、歩と驢では五十里、車では三十里」

すなわち、「1 日 50 里」とされているが、『唐六典』は 8 世紀の唐の時代に成立した法制書であり、三国時代は司馬懿の「1 日 40 里」がふさわしいことはいうまでもなかろう。

狗邪韓国

すでに述べたとおり、狗邪韓国は弁韓 12 か国の一つの狗邪国ないし弁辰狗邪国のことで、金首露が建国したとされる六加羅の盟主たる金官加耶(加羅)のことである。『日本書紀』神功皇后紀では「南加羅」と書かれている。

洛東江の河口部にあり、南は対馬海峡に面している。

『魏志倭人伝』に「其(倭)の北岸狗邪韓国」、『後漢書』に「其(倭)の西北界の狗邪韓国」とあることから、狗邪韓国は倭と陸地で境界を接し、あるいは倭の北端の一国とみなす余地もありそうではあるが、イザナギ・イザナミの国生み神話が朝鮮半島に及ばず、壱岐・対馬でとどまっていることをみれば、否定的に解すべきであろう。

しかしながら、これまで縷々述べたように、弥生式土器の分布などからみて、倭人の活動領域が朝鮮半島南部に及んでおり、狗邪韓国の領域内においても、倭人および倭人系の集落が形成されていたことは確実である。

紀元前後のわりと早い段階から、倭人および倭人系の集落が「任那」と呼ばれていた可能性についても、前述したとおりである。

対馬

「(狗邪韓国から)始めて一つの海を度(わた)り、千余里にして対馬国(つしまこく)に至る。其の大官を卑狗(ひこ)と曰(い)い、副を卑奴母離(ひなもり)と曰(い)う。居る所絶島にして、方四百余里可(ばか)り。土地は山険しくして、深き林多く、道路は禽鹿(きんろく)の径(こみち)の如し。千余戸有り。良田無く、海の物食(くら)いて自活す。船に乗りて、南北に市糴(してき)す」

という『魏志倭人伝』の記事は、短文ながら対馬の自然環境や人々の暮らしぶりを実に的確に描

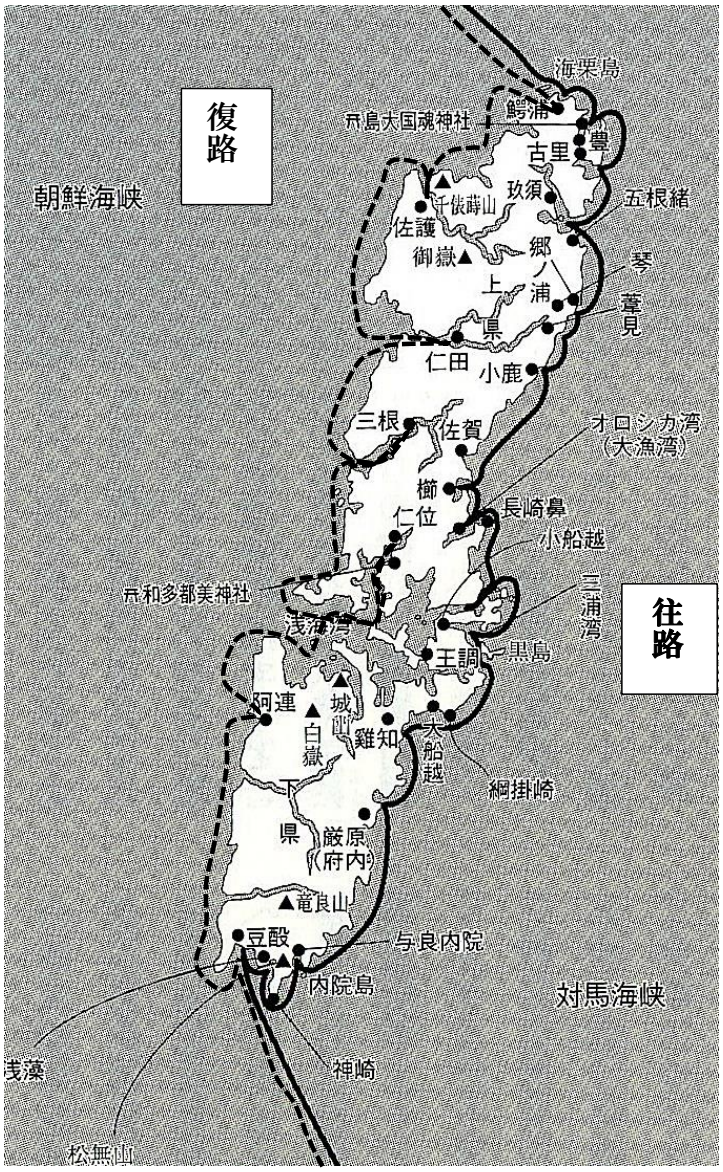
写している。

対馬への水行の起点は、狗邪韓国(金海)である。対馬北端の鰐浦あたりをめざしたであろう。神功皇后の朝鮮への出港・帰港地と伝わる。

下図は、神功皇后が朝鮮半島に向かう際の伝承地である。

往路は対馬の東岸、復路は西岸をたどっている。対馬海流が西から東に流れていることを考慮したものであろう。往路は西からの対馬海流を避け、復路は対馬海流によって東に流されても対馬が受け止めてくれる。

金海から鰐浦まで約 62 km。帯方郡の使者たちは、邪馬台国の使者たちの水先案内を受けながら、対馬の西海岸を船で南下していったであろう。



神功皇后朝鮮出兵の航路

地勢

対馬は南北 82 キロ、東西約 18 キロの細長い島で、面積は、約 700 平方キロ。

島全体がおおむね標高 100～300 メートルの低い山地で覆われており、島の 88 パーセントが山林で、耕地面積は今でもわずか 0.3 パーセントに過ぎない。

『魏志倭人伝』のとおり、山は険しく、森林が多く、良田に恵まれず、海産物を食して暮らすしかなかった。そして、船に乗って、「南北に市糴(してき)」し、朝鮮半島や壱岐・九州本土を船で往来し、米などの食糧を求めた。獲れたばかりの新鮮な魚類をその日のうちに朝鮮半島まで運び、そこで米などの食糧品と交換していたかもしれないが、主力品は干物や塩漬けなど保存措置を施した海産物であったろう。

戸数は「千余戸」。1 戸当たり 5 人としても 5,000 人ほどの人口である。壱岐は「三千許家(ばかりのいえ)」とされているから、対馬の 3 倍の人口である。のちに述べるように、壱岐は平地が多く、水田が多い。農業生産力の差が人口の差にあらわれているといえよう。

下表のとおり、対馬が壱岐の人口を上回ったのは、大正 9 年の第 1 回国勢調査以降である。

時代	対馬(A)	壱岐(B)	差引(A)－(B)	備　考
邪馬台国時代	1,000 戸	3,000 許家	▲2,000 戸	『魏志倭人伝』
奈良時代	7,000 人	10,600 人	▲3,600 人	沢田吾一『奈良時代民政経済の数的研究』
江戸(弘化 3)	16,900 人	27,000 人	▲10,100 人	『吹塵録』
大正(大正 9)	56,646 人	38,669 人	17,977 人	第 1 回国勢調査
昭和(昭和 30)	67,140 人	51,765 人	15,375 人	昭和 30 年国勢調査
令和(令和 2)	28,502 人	24,948 人	3,554 人	令和 2 年国勢調査

面積

面積について、『魏志倭人伝』は、対馬「方四百余里」、壱岐「方三百余里」とする。

「方」というのは四角形(正方形)の一辺の長さであるから、面積はその二乗となる。

実測面積と比較すると次のとおり。

		対馬	壱岐	比率
魏志倭人伝	一辺の長さ(A)	方 400 里	方 300 里	57.1 ： 42.9
	面積	160,000 里^2	90,000 里^2	64.0 ： 36.0
実測	面積	696 km^2	139 km^2	83.4 ： 16.6
	一辺の長さ(B)	26.4 km	11.8 km	69.1 ： 30.9
1 里の長さ(B)÷(A)		66m	39m	

対馬の 1 里は 66 メートル、壱岐の 1 里は 39 メートルほどしかならない。しかもバラバラである。

方 400 里と方 300 里は、実測に基づかない単なる目分量・感覚的な数値であることがわかる。

卑狗(ひこ)と卑奴母離(ひなもり)

邪馬台国の卑弥呼は、朝鮮半島に通じる対馬と壱岐に、卑狗と卑奴母離の二人を配置した。

そして、対馬と壱岐のほか、伊都国(糸島市)、奴国(福岡市等)、不弥国(宇美町等)の九州北岸・玄界灘沿岸地域および投馬国(おそらく豊前方面)にも、下表のとおり、原則二人の官を配置した。

ちなみに、瀬戸内地方や近畿方面の国々はまったく姿を見せない。明らかに九州が舞台であることを示している。

国名	対馬	一支	末盧	伊都	奴	不弥	投馬	邪馬台
官	卑狗	卑狗		爾支	兜馬觚	多模	弥弥	伊支馬
	卑奴母離	卑奴母離		泄謨觚柄渠觚	卑奴母離	卑奴母離	弥弥那利	弥馬升
名								弥馬獲支
				一大率				奴佳鞮

対馬と壱岐には、「卑狗(ひこ)」と「卑奴母離(ひなもり) 」が配置されている。長官と次官として、その国の政治・軍事・祭祀を統括したであろう。

まず、卑狗については、「日子＝彦＝ひこ」とみるのが多数説である。男子の伝統的な尊称として、現代でも男子の名に用いられることがある。

そして、卑弥呼の「卑」が「日」であることを補強していることに留意すべきであろう。

「日子」という称号には、倭国ないし邪馬台国の太陽崇拝が如実にあらわれている。卑弥呼は「日の巫女」として太陽を祭り、卑狗すなわち「日子」もまた派遣された地で太陽を祭ったであろう。

ところが、卑奴母離(ひなもり)については「夷守(ひなもり)」とするのが一般的である。まるで、辺境の地を守る万葉時代の「防人(さきもり)」のようなニュアンスではないか。間接的に近畿説を補強していることはいうまでもなかろう。

卑狗の場合は「卑」を「日」と読む。ならば、卑奴母離の「卑」もまた「日」と読むべきではないか。

「夷守」ではなくて、「日守」と読むべきではないか。

母離を守(もり)と読むべきことについては、『出雲国風土記』が参考になる。

『出雲国風土記』母理郷の条に、大国主命が「玉珍(たま)賜いて守らぬ」と宣したことから「文理

(もり)」という地名が生まれ、のち「母理」と改めたとある。母離は文理＝母理＝守(もり)である。

日守(ひまもり)八幡神社

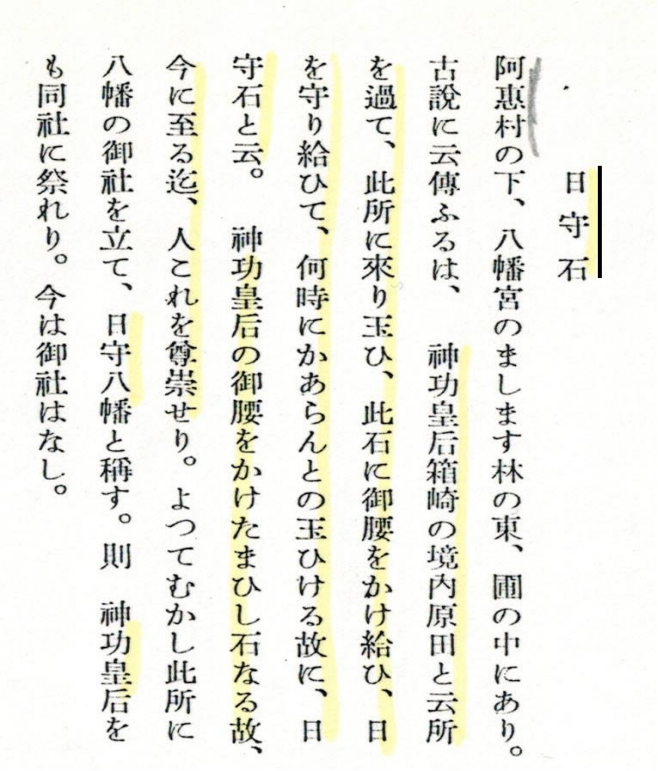
このことを補強する別の事例について紹介しておきたい。

下図は、律令時代の官道図である。大宰府を中心に整備され、各所に駅(うまや)が置かれた。この図をみると、糟屋郡に「夷守駅」が所在していることがわかる。

別途また述べるが、筆者はこの地こそ「不弥国」の卑奴母離が配置された場所とにらんでいる。

実は、その地には現在「日守(ひまもり)八幡神社」(糟屋郡粕屋町阿恵 288)がある。

江戸時代の貝原益軒の『筑前国続風土記』に記されている。



日守石

阿恵村の下、八幡宮のます林の東、圃の中にあり。古説に云傳ふるは、　神功皇后箱崎の境内原田と云所を過て、此所に來り玉ひ、此石に御腰をかけ給ひ、日を守り給ひて、何時にかあらんとの玉ひける故に、日守石と云。　神功皇后の御腰をかけたまひし石なる故、今に至る迄、人これを尊崇せり。よつてむかし此所に八幡の御社を立て、日守八幡と稱す。則　神功皇后をも同社に祭れり。今は御社はなし。

日守石(ひまもりいし)

日守石は阿恵村の南方、八幡宮のある林の東側にあったらしく、神功皇后が原田方面(福岡市東区)からやってきて村に着いたとき、その石に腰かけて休息した。このとき、神功皇后は、「この石は、日を守り続けてどれくらいの時がたったのだろうか」と尋ねたところから日守石と呼ぶようになったという。その後村人たちはこの地に日守八幡神社を建てて神功皇后を祭った。

また、日守八幡神社の東南 4 キロにある旅石八幡宮（糟屋郡須恵町旅石）にも、

「神功皇后、日守にて日の早晩を伺はせたまひ、その後ここ（旅石）に来りたまふ」

と、神功皇后が日守石のある阿恵村で時刻を尋ねたことが伝わっている。

阿恵には、日守石の影の長さや形、方角などによって時刻や季節を判断する日守がいたとみられる。

要するに、夷守は「日守」であり、日守石は日時計の役割を果たしていたことが伝承として残されているのである。

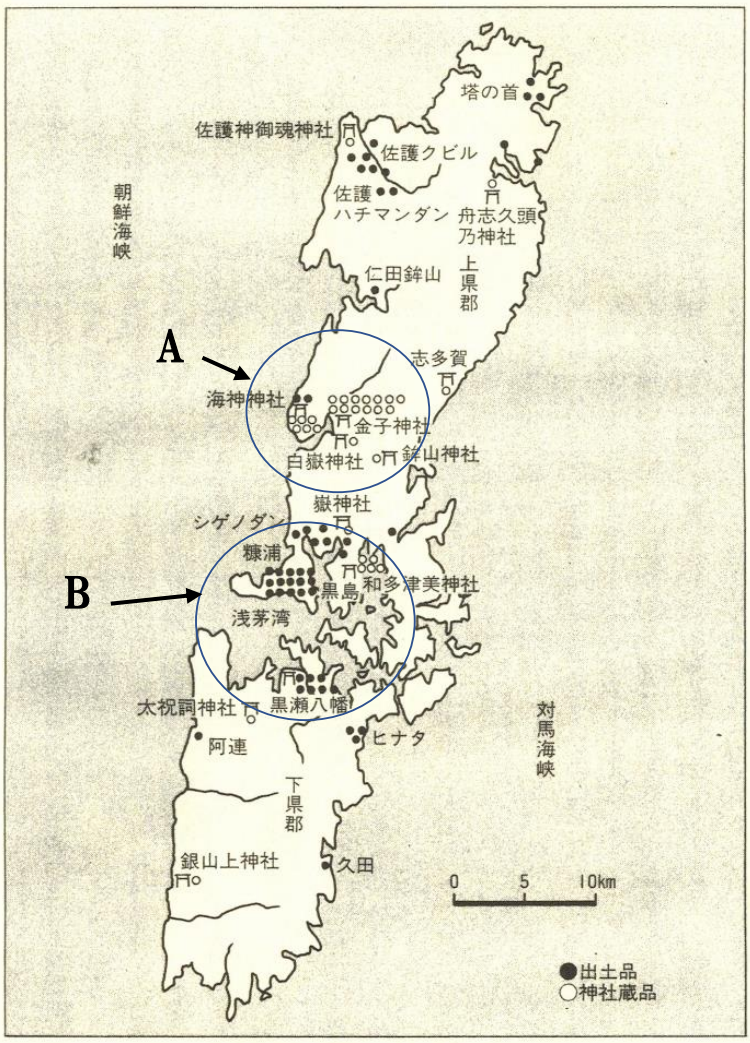
これまた、「卑奴母離(ひなもり)＝日守(ひまもり・ひもり)」を補強するものであろう。

太陽を祭り、影の長さと方角で時刻を知り、日の出と日没の方向などで春夏秋冬を知り、時季に応じた祭祀を行い、吉凶を占う。

「卑狗(日子)」と「卑奴母離(日守)」は、政治・軍事とともに祭祀を営むために派遣されたのである。

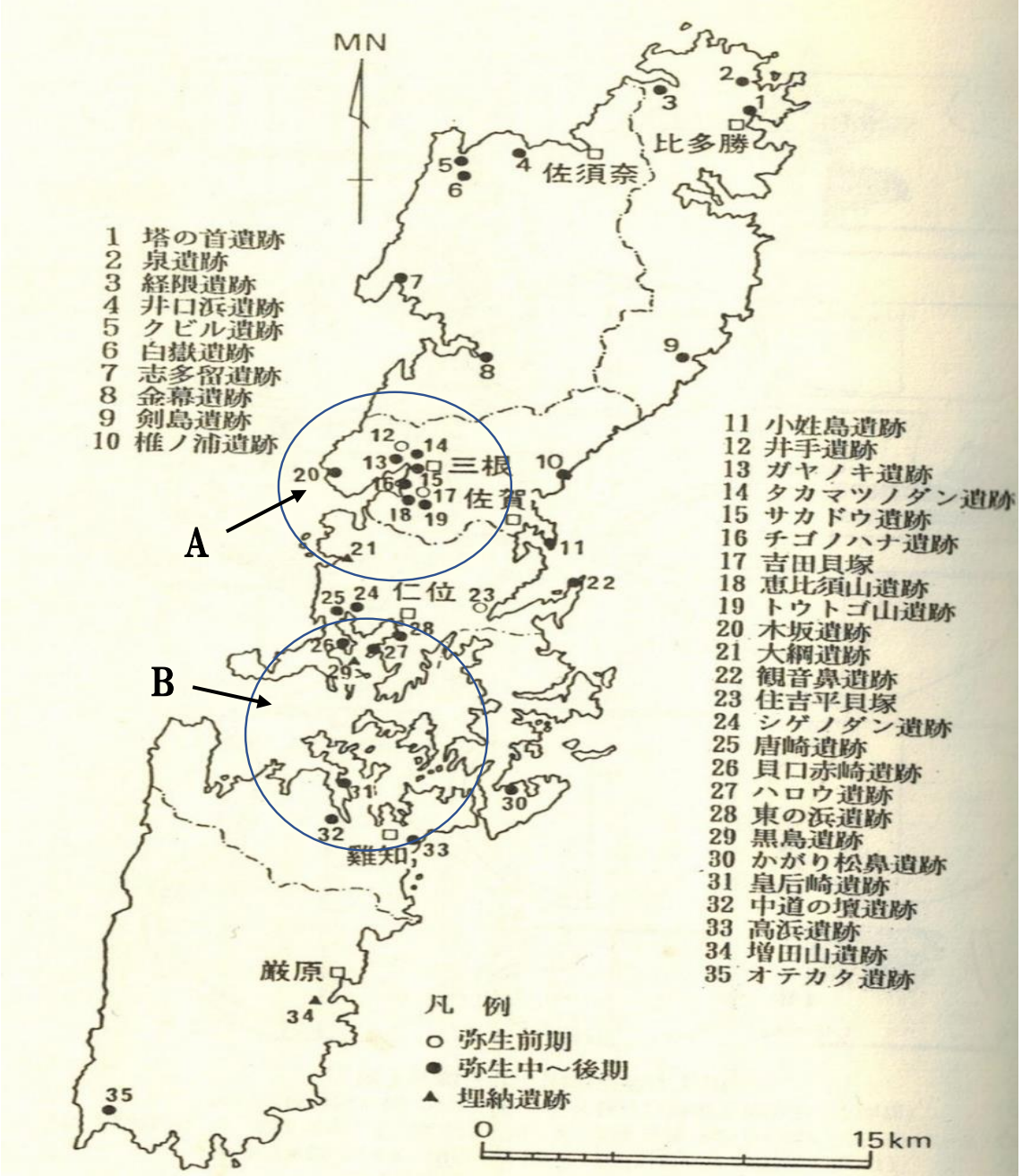
邪馬台国時代の対馬の中心地（都）の所在地

後述するように、壱岐の場合は「原の辻遺跡」が王都であることは疑いないが、対馬については現時点ではよくわかっていない。ただし、遺跡の分布や遺物の出土状況などから、その候補地がみえてくる。



地図10　対馬の広形銅矛の分布

(A)は上県郡の峰町三根　(B)は下県郡の豊玉町仁位



対馬の主要な弥生遺跡
（安楽勉「対馬国――大陸最短の島の遺跡群」『季刊考古学』51号，1995）

小型仿製(ぼうせい)鏡、鉄剣などの邪馬台国時代の遺物の分布をみると、

(A)上県(かみあがた)郡の峰町三根

(B)下県(しもあがた)郡の豊玉町仁位

二つの圏域に集中しており、このいずれかに対馬の王都があった可能性が高い。

【A】上県郡の峰町三根

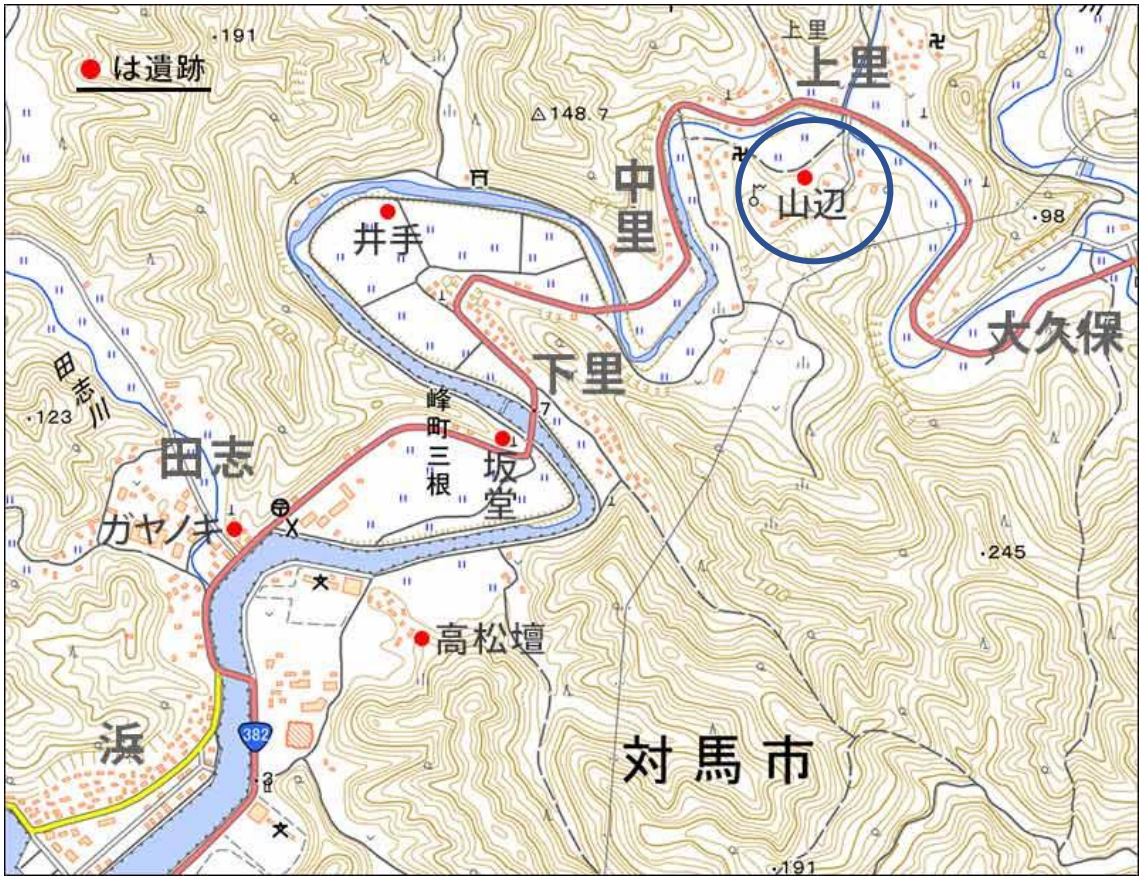
峰は三根、美女などとも書かれる。

三根川が内川とヤカノ内川と合流しながら三根湾に注いでいるが、その流域に上里、中里、下里などの古い集落があり、周辺からは縄文・弥生時代から古墳時代までの遺物が出土している。

このうち、三根の大規模集落「山辺(やんべ)遺跡」が注目されている。

旧峰町教育委員会が平成 12 年(2000)年 10 月に発表した調査結果によると、三根遺跡山辺区から対馬で初めての弥生時代の大規模集落が出土した。集落は邪馬台国時代の弥生終末期を中心に、弥生前期から古項時代まで連続しているという。

発掘調査区域は 7～8 千平方メートルで、三根遺跡全体では約 40 万平方メートル以上の範囲とみられ、さらに大規模な集落跡が見つかる可能性は高いが、その後の発掘調査はあまり進んでいない。



対馬に弥生の大集落

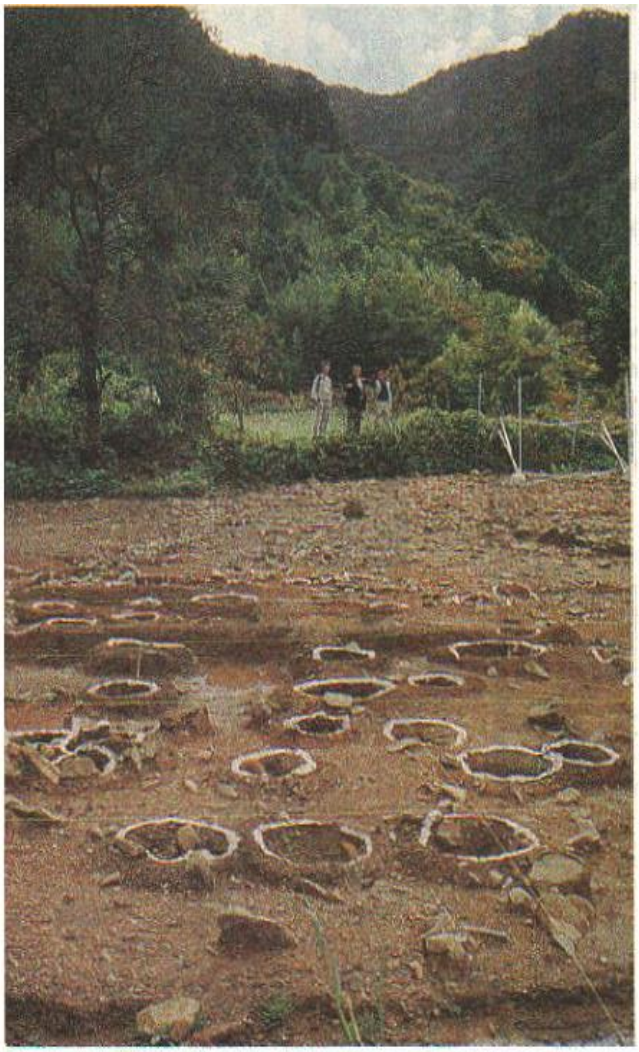
倭人伝 記述裏付け？

土器も1万点以上

中国の史書「魏志倭人伝」に倭国の玄関口として記された「対馬国」の中心とみられる弥生時代の大規模集落が、長崎県対馬・峰町の三根遺跡山辺区で出土したことが二十七日、同町教委の発掘調査でわかった。倭人伝のクニグニのなかで明確な中心集落跡が確認されているのは、一支国（長崎県壱岐）の首都とされる原の辻遺跡だけ。大陸からの先進文化の橋渡しとして弥生文化の成立に大きな役割を果たし、邪馬台国の勢力圏の最前線をも担った「対馬国」の解明に向けて重要な手がかりを得たことになる。

これまでに百本以上の柱穴が出土。少なくとも三、四棟の高床式倉庫や二基以上の竪穴式住居跡が確認されている。調査されたのは、山辺区約四万平方㍍のうち、七千―八千平方㍍で、三根遺跡全体では山辺区の十倍以上の範囲に広がっているとみられる。

合計一万点以上の弥生土器や古墳時代の須恵器や土器、鏡、青銅器・鉄剣等・鉄斧等の土器や陶質土器が出土、盛んな〝国際交流〟を思わせる。



魏志倭人伝記載の「対馬国」との関連が注目される対馬初の弥生集落。奥は遺跡を視察する小田富士雄・福岡大教授ら＝27日午前、長崎県峰町の三根遺跡山辺区で

魏志倭人伝には三十のクニグニの名があるが、位置が確定しているのは対馬国、一支国、末盧国（佐賀県唐津市）、伊都国（福岡県前原市付近）、奴国（同春日市付近）のみ。対馬中部の三根湾周辺は、青銅器を副葬した首長級の墳墓の密集地で、これらと深いつながりがあるとみられる。

森浩一・同志社大名誉教授は「峰町は一番注目していたところだ。倭人伝の情報は、峰町辺りに使者が滞在してあの紀行文を書いた可能性が高い」という。

現地を視察した小田富士雄・福岡大教授の話　対馬で初めての弥生集落だ。これからの集落探しの貴重な手がかりになるだろう。今後の調査では当然、倭人伝や「対馬国」の視点が求められてくることになる。

朝日新聞 2000 年(平成 12 年)10 月 28 日

【B】対馬市豊玉町仁位

仁位という地名は美しい玉を意味する瓊(に)に由来するという(『津島紀事』)。

「爾伊」「二位」「二」などとも書かれる。

対馬中央部にあり、浅茅湾に面している。豊玉という地名は昭和 30 年に仁位村と奴加岳(ぬかだけ)村が合併したときに新しくつくられたものである。

中心地の仁位は浅茅湾の北東に位置し、仁位川は東西の峡谷に源を発し、やがて合流して浅茅湾に注ぎ込むが、その合流地点付近にある集落である。

弥生時代から古墳時代の遺跡があり、和多都美(わたつみ)神社(豊玉町仁位)をなど多くの神社がある。

古代日本の伝統風俗を残す対馬

対馬には、古代日本の失われた伝統風俗が残されているようにおもえる。

(1) 対馬の神社

平安時代の「延喜式神名帳」には、九州全体で 98 の神社(式内社)が記録されているが、対馬は 29 社(30.0%)を占めており、九州最多である。江戸時代の調査では 455 社あったというから、沖ノ島が無人の神の島であるとすれば、対馬は有人の神の島であったともいえる。

前述した卑狗(日子)と卑奴母離(日守)は、(A)上県郡の峰町三根、(B)下県郡の豊玉町仁位のいずれかに拠点を置いたであろうが、全島を支配するため島内各地域に部下を配置したであろう。そして、部下たちは卑狗(日子)と卑奴母離(日守)のごとく、村々で政治・軍事・祭祀をつかさどったであろう。その拠点が現在の神社につながった可能性があり得よう。

そのことを裏づけるように、邪馬台国時代に用いられた祭祀用の広形銅矛などを伝来する神社やワタツミ三神・住吉三神など古代の神々を伝える神社も少なくない。

(2)産屋と殯屋

峰町の海人(かいじん)神社近くの木坂の集落は川の北側にあるが、女性は川の南側の「産屋(うぶや)」で出産し、産後しばらく忌が開けるまで滞在したといわれる。

日本の古代神話のなかでも、豊玉姫や玉依姫などが産屋で出産したと記されている。

川の南側には「参り墓」も設けられている。仮墓、殯(もがり)墓のことである。殯屋(もがりや)とも呼ばれる。

産屋と殯屋がおなじ区域に作られるのは、古代日本の伝統である。出産時の新生児死亡率が非常に高かったため、産屋を殯屋に転用せざるを得ないという事情があった。

『魏志倭人伝』には、

「始(いま)し死したらば、喪(なきがら)を停(とど)むること十余日」

「すでに葬らば、家を挙(こぞ)りて水中に詣(いた)りて澡浴(そうよく)す」

と書かれている。

すなわち、10 数日間殯屋(もがりや)に遺体を安置したのち、墓に埋葬し、遺族は川などで禊(みそぎ)を行なった。

峰町の木坂では、産屋と参り墓は川の南側にあり、本墓である「埋め墓」はさらに南方の山を越えた海岸近くにある。殯墓と本墓という両墓制の形態をとっている。

遺体を一定期間洞窟などに置いて風化したのちに遺骨を水で洗い、その後改めて本墓に納骨するかつての沖縄の風葬とも共通する。

殯は、音読みでは「ヒン」と読む。「もがり」と読むのは訓読み――すなわち日本語読みである。

現在、峰町の木坂の海岸近くに、石造りの「藻(も)小屋」が 8 棟立ち並んでいる。

藻を貯蔵したため「藻小屋」と呼ばれ、船の格納に利用される場合は「船屋」と呼ばれた。

かつては、対馬西海岸を中心に多数存在したが、現存するのは、木坂のこの 8 棟のみとなっている。壁は石を積み上げ、もと対馬の伝統的な石屋根であったが、屋根瓦で復元されている。

殯を「もがり」と読むようになったのは、藻小屋を遺体安置のために転用したからではないか。藻屋＝喪屋＝「もや」、藻刈屋＝殯屋＝「もがりや」である。

ちなみに、関門海峡に面する九州の最突端に和布刈（めかり）神社（北九州市門司区）がある。毎年旧正月に、ワカメ刈りの神事がおこなわれ、福岡県の無形民俗文化財に指定されている。「和布」の「め」は「藻(も)」で、ワカメのことである。新春元旦の神事として「和布（め)」を刈ることから「和布刈（め・かり）神社」と呼ばれるようになった。韓国南部でも妊娠などの祝事に際し、あるいは病気回復を願ってワカメを食する伝統があると聞いたことがある。

ワカメに関して、日韓での何らかの民俗学的な調査が必要かもしれない。

⑶亀卜の法

『古事記』には、「太ト(ふとまに)に卜(うら)へてのりたまひしく」（骨卜で占っておっしゃられるには）や「真男鹿(さをしか)の肩を内抜きに抜きて、波々迦(ははか)を取りて、占合まかなはしめて」（男鹿の肩骨を抜いて、カバノキを取って、焼いて占いをさせた）など、

鹿の骨などを焼いて占ったという記事がある。

『魏志倭人伝』**にも**、「倭人が行事や旅行に際し、骨を灼いて吉凶を占った」、「中国の亀卜(きぼく)の法のように、火で焼いたひび割れをみた」と記されている。

羊や鹿、猪など動物の骨で占うものを「骨卜(こつぼく)」といい、亀の甲羅(こうら)を用いて行うものを「亀卜(きぼく)」という。

骨卜のことは、『古事記』『日本書紀』『常陸風土記』『延喜式』『万葉集』などにも出てくる。

『養老令』で「卜部 20 人」と定員が規定されているなかで、『延喜式』巻 3「臨時祭卜部宮主の条」にはその術者「卜部には優秀な者を伊豆 5 人、壱岐 5 人、対馬 10 人を採用すべし」と対馬が圧倒的な人材を誇っていたことが記されている。

実は、全国で唯一、雷命神社(厳原町阿連)に「亀卜」の伝統が残されている。

旧歴 正月 3 日には年を占うサンゾーロー祭りでその儀式が行われる。

雷神社の祭神の雷大臣命が対馬卜部の祖で亀の甲羅を熱して占う「亀卜」を伝えたとされる。雷大臣命は神功皇后時代の中臣烏賊津(なかとみのいかつ)のことである。

しかしながら、中国発祥の亀卜の法は、邪馬台国の時代にはすでに日本に伝わっていたことが『魏志倭人伝』で確認できる。中臣烏賊津(雷)から伝わったのではなく、逆に対馬の方から中臣烏賊津(雷)に伝わったのであろう。それを修得し継承したために、中臣烏賊津(雷)の名がとどめられたのであろう。

(4)石屋根の小屋(コヤ)

対馬には、伝統的な「小屋(コヤ)」がある。

対馬のコヤは、石屋根の高床式倉庫である。住居には使用されず、衣類などの櫃や箪笥、米などの食糧が格納され、しかも母屋から離して建てられる。母屋の火災や自然災害などから財産と食糧を守るために配慮したものとされる。

下県郡の椎根という集落に多く残されており、母屋群は山際に一列に並び、コヤ群は中央を流れる川の両岸に建てられている。

『魏志』高句麗伝に、

「大いなる倉庫無く、家々に自ら小倉有り。これを名づけて桴京(ふけい)と為す」

とある。

「小倉＝桴京」であるから、意味としては、「小と桴」、「倉と京」が対応しているのであろう。

「桴京(ふけい)」は高句麗語の音訳とみられ、「京」の上古音「きぁ(kiäŋ)」と対馬の「小屋(コヤ)」は、いずれも k 音で始まり、全体的な発音も似ているようであるが、これ以上の情報を持ち合わせていないため、不明としかいいようがない。

ただし、弥生時代の集落では、竪穴住居の区画と高床式倉庫の区画が離して配置されるケースが多いのは事実で、対馬のコヤは、そのような日本の古代文化の伝統を継承しているのは確かであろう。

(5)筏船

古代の倭人が航海術に長けていたことはまちがいない。

王の装身具のためのゴホウラ貝やイモ貝獲得のためにはるばる沖縄方面と往来している。新潟県の糸魚川方面のヒスイも北部九州の弥生遺跡から出土している。朝鮮半島とも往来し、中国前漢時代の青銅鏡も大量に入手している。東西南北 1000 キロメートルに及ぶ航海である。

ところが、どのような船を用いていたのか、それがよくわからない。

丸木舟(刳舟)という着想はすぐに浮かぶが、丸木を用いるため、当然横方向からの力に脆弱である。波静かな河川や近海ならともかく、波荒い海洋では横転・転覆の危険性が非常に高い。

丸木舟を土台とした準構造船は、弥生時代に登場しており、その部材の一部が青谷上寺遺跡(鳥取市)や潤地頭給遺跡(糸島市)など複数の箇所で見つかっている。

古墳時代以降の準構造船についても、各地で埴輪も出土し、多角的な分析研究が進められている。

西都原古墳(宮崎県西都市)

このようなことから、「丸木舟から準構造船へ」というのが進化の主流ではあろうが、本稿においては別の観点から、古代の船について述べてみたい。

実は、3 年前の令和元年 3 月、新型コロナ感染騒動が勃発したばかりのころ、前々から計画していた対馬旅行を敢行した。博多から対馬までの高速艇は予定どおり運航していたものの、乗客はまばらで、現地でも一人の観光客も見ることができなかった。

北から南まで、神社や遺跡を予定どおり訪ね、対馬の海鮮料理を堪能した。上県町佐護西里の天神多久頭魂神社を参拝したのち、河口近くで休憩していると、ふと川岸の空き地に放置された木材の構造物が目にとまった。

近寄って確認すると、まさしく筏船(いかだぶね)であった。

目分量で長さ 5 メートル、幅 2 メートルくらいで、釘一本使わない組み立て式になっている。組立・解体するのに 30 分とかからないという。縦横にきっちりはめ込まれた部材は、あらゆる方向からの負荷に耐える構造になっている。船底が平であるために、丸木舟にくらべるとはるかに転覆しにくいであろう。木材の選び方次第で、筏船の大きさは自由自在となる。目の前の筏船は小型船であろう。かつては中型船、大型船も建造されたにちがいない。

堅牢な組み立て式の構造であるから、外海を航海してもバラバラになることはない。甲板上に船室を作り、帆柱を立てることもできる。側板をつけることもできる。聞くと、済州島にもおなじような筏船があったという。太平洋の島々や台湾などでも、筏船が主流であったともいう。

組み合わせ次第では、筏船の両側に丸木舟を接続したいわゆる双胴船にすることも可能であろう。

丸木舟から準構造船への進化という道筋とともに、筏船という要素を検討することも必要ではないか。対馬の筏船を見て、そういう思いを抱いたので、あえてここに記した次第である。

対馬から壱岐へ

帯方郡の使者たちは、対馬最南端の豆酘から壱岐に向けて出港したにちがいない。

『魏志倭人伝』には、

「又南して一つの海を渡る。千余里なり。名づけて瀚海(かんかい)と曰(い)う。一大国に至る。官を亦(ま)た卑狗と曰(い)い、副を卑奴母離と曰(い)う。方三百里可(ばか)りなり。竹木の叢林(そうりん)多し。三千許(ばか)りの家有り。差(やや)田地有りて、田を耕せども、猶(な)お食うに足らず。亦(ま)た南北に市糴(してき)す」

と書かれている。

「瀚海(かんかい)」という海峡名は、現在の「玄界(げんかい)灘」に通じているようである。

一大国はむろん一支国の誤りであろう。『魏略』の逸文、『梁書』、『隋書』では「一支国」と記されている。

『魏志倭人伝』もまた人が書いたものであり、絶対的なものではない。本稿では「一支」ないし「壱岐」と適宜表記する。

卑狗と卑奴母離、方三百里、三千許家などについては、対馬の項で述べたとおりである。

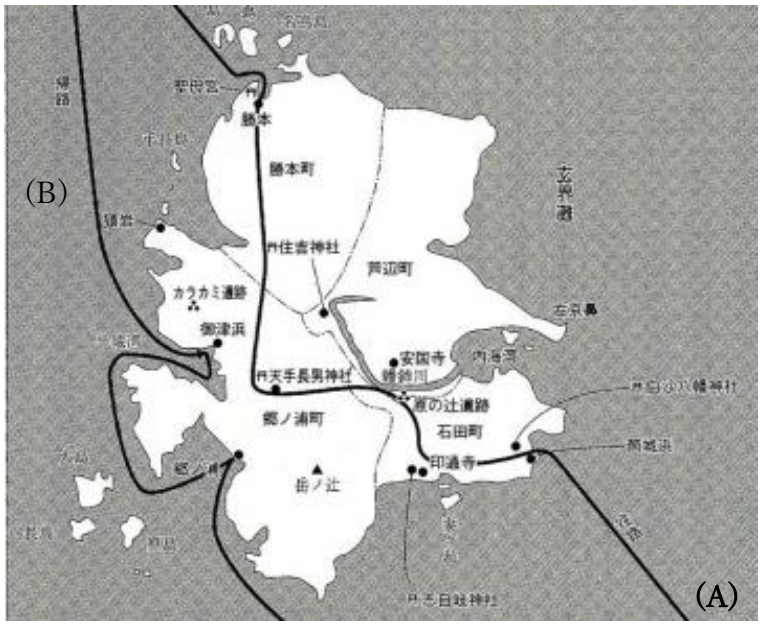
水田はあるが、それでも不足するため、対馬とおなじく食糧を求めて南北に市糴(してき)していた。対馬を経て朝鮮に渡り、あるいは九州北部と交易をおこなっていた。福岡市の生(いき)の松原という地名は壱岐に由来する。

対馬から壱岐まで千余里。対馬南端の豆酘から壱岐北端の勝本まで約 52 キロメートル。そこを一日で航海したであろう。

壱岐は東西約 15 キロ、南北約 17 キロで、海岸線は屈曲に富み、特に西海岸はリアス式の深い入江が形成されている。全体的に見れば島の西部が高く、東部が低い、なだらかな台地状の地形で、海抜 20～100 メートルの土地が大半を占め、島で最も高い岳ノ辻でも標高 213 メートルに過ぎない。

弥生時代にはほぼ全島に人々が住んでいたとみられているが、とりわけ内海湾に注ぎ込む幡鉾川の流域に遺跡が濃密に分布しており、下流域の「原の辻遺跡」が一支国の都とみられている。

当然、帯方郡の使者たちも、そこをめざしたであろう。



上図の(A)は神功皇后朝鮮出兵時の往路の伝承地である。壱岐は平坦な島であるため、陸路で北の勝本まで向かっている。(B)は帰路である。

帯方郡の使者たちも、険しい対馬とは異なり、勝本から陸路で原の辻に向かった者もいたであろう。

壱岐国の都――原の辻遺跡（芦辺町深江鶴亀触）

幡鉾川流域の深江田原に南から突き出た丘陵地があり、平成 3（1991）年から長崎県教育委員会によって本格的な調査が行われた。この結果、紀元前 2 世紀から紀元後 3 世紀頃にかけての弥生時代全期にわたる大規模な多重環濠集落であることが判明し、一支国の王都と断定された。

遺跡全体では 100 ヘクタール。南北約 750 メートル、東西約 350 メートルの外濠で囲まれた範囲は約 24 ヘクタールに及んでいる。農業と漁業双方の遺物が出土しており、米づくりとともに漁業が行われていた。

環濠

環濠の内側の区画からは、宮殿とみられる建物跡や竪穴住居跡、時代の異なる建物跡、おびただしい建材や土器類も出土した。

平成 8 年（1996）には、紀元前 2 世紀頃の日本最古の石組みの船着場も発掘されている。「敷粗朶(しきそだ)工法」を用いるなど、中国漢代のものと共通するきわめて高度な技術でつくられていた。「敷粗朶工法」とは、地盤沈下を防ぐため、堤防の基礎部分に木の皮や枝などを敷き込むものであ

る。

日本最古の弥生時代中期の高床式建物の床の土台である「床大引(ゆかおおびき)」も出土している。

また、日本最古のトンボ玉(弥生時代中期)やガラスの勾玉(弥生時代後期)をはじめ約 2000 個というおびただしいガラス製品が出土している。

日本最古といわれる木製の盾や五十本以上の青銅製の鏃なども出土しており、一支国の軍事拠点でもあった。

濠の中からは前漢時代の五銖銭(直径 25.55 ミリ、重さ 2・1 グラム〕や新時代の貨泉や大泉五十(だいせんごじゅう)も出土しており、交易・交流の一大拠点でもあった。

五銖銭

平成 6(1994)年に、環濠内の竪穴式住居跡から、動物の骨が数点出土し、弥生中期の猪の肩甲骨(けんこうこつ)で、骨卜(こつぼく)に用いられたものであることが判明した。

九州本土に向かう壱岐最南端の港は、印通寺(いんどうじ)である。ただし、これは後世の地名で、神功皇后伝承に基づく。

朝鮮出兵に臆して逃亡を図った一人の王に向かって、怒り狂った神功皇后が矢を射ると、その王の胸を射通(いどお)したため、「射通(いどう)」すなわ「印通(いんどう)」という地名になったという(『壱岐国続風土記』)。地元の伝承では、逃亡を企てた王とは、仲哀天皇の異母弟の十城別王(と

おきわけのきみ)という。ヤマトタケルと吉備武彦の娘の吉備穴戸武媛の間に生まれ、四国の伊予別君の始祖とされている人物である。

十城別命が死んだ場所は、「死しき」と呼ばれ、「爾自岐」と書かれたが、その後「志自岐」と書かれ、その近くには志自岐(しじき)神社(石田町南触字若宮)が祭られている。

それとは別に、神功皇后は印通寺東方の筒城(つつき)の浜から上陸したという伝承も残されている。

対馬の最南端の港が豆酘(つつ)と呼ばれたように、筒城(つつき)あるいは筒(つつ)が壱岐最南端のよく知られた港であったのかもしれない。筒の中のような安全な航路もしくはその拠点的な港を筒と呼んだ可能性もあり得る。瀬戸内海は「穴の海」と呼ばれた。穴の入り口が穴戸あるいは穴門(山口県)である。関門海峡をさす。

イザナギの禊によってワタツミ三神とともに生まれたとされる住吉三神は、底筒男命(そこつつ)・中筒男命(なかつつ)・表筒男命(うわつつ)という。ワタツミは海の類縁語であろうことは容易に想像できるが、筒(つつ)についてはさっぱり見当がつかないでいた。今回、「筒の中のような安全な航路もしくはその拠点的な港」と一応定義してみたが、自信があるわけではない。もし詳しい情報をお持ちの方がおられたら、ぜひともご一報いただきたい。

それはともかく、対馬から壱岐に到着した帯方郡の使者たちは、いよいよ九州本土に向かった。

めざすは末盧国(まつろ)である。

(以下、次号へつづく)

河村哲夫(かわむら・てつお)

1947 年(昭和 22)年福岡県柳川市生まれ。
九州大学法学部卒
歴史作家、日本古代史ネットワーク副会長
福岡県文化団体連合会顧問
ふくおかアジア文化塾代表
立花壱岐研究会会員
元『季刊邪馬台国』編纂委員長
西日本新聞 TNC 文化サークル講師
朝日カルチャーセンター講師
大野城市山城塾講師

〈おもな著作〉

『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全 5 巻)』(1995 年海鳥社)
「小楠と立花壱岐」(1998 年『横井小楠のすべて』(新人物往来社)
『立花宗茂』(1999 年、西日本新聞社)
『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999 年角川書店)
『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001 年西日本新聞社)
『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003 年海鳥社)
『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006年海鳥社)
『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007年 11 月梓書院)
「北部九州における神功皇后伝承」(2008 年、『季刊邪馬台国』97 号、98 号)
「九州における景行天皇伝承」(2008 年、『季刊邪馬台国』99 号)
「『季刊邪馬台国』100 号への軌跡」(2008 年、『季刊邪馬台国』100 号)
「小楠と立花壱岐」(2009 年 11 月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)
『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010 年 3 月海鳥社)
「小楠の後継者、立花壱岐」(2011 年 1 月、『環』藤原書店)
『天草の豪商石本平兵衛』(2012 年 8 月藤原書店)
『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013 年 12 月原書房)
『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014 年 6 月原書房)
『法顕の旅・ブッダへの道』(2012～2016 年『季刊邪馬台国』114 号～124 号に連載)

(テレビ・ラジオ出演)

平成 31 年 1 月 NHK「日本人のおなまえっ！　金栗の由来・ルーツ」
平成 28 年より RKB ラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演